

(4) 定点把握対象五類感染症の概況

ア 患者定点について(表-3/p.33, 京都市感染症発生動向調査事業指定届出機関(定点)名簿/p.157~160)

定点把握対象五類感染症の発生状況を届出る「指定届出機関(定点)」は、インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点、性感染症定点および基幹定点の5種類からなっており、診断した患者数を週又は月単位で報告することになっている。

令和2年12月末の定点数は、インフルエンザ定点69、小児科定点43、眼科定点10、性感染症定点13、基幹定点1である。

行政区別定点数（令和2年12月末現在）

行政区＼定点	インフルエンザ	小児科	眼科	性感染症	基幹
北	7	4	1	1	—
上京	5	3	1	1	—
左京	7	4	1	1	—
中京	5	3	2	2	1
東山	3	2	—	1	—
山科	7	5	1	1	—
下京	3	2	—	1	—
南	5	3	—	1	—
右京	8	5	1	1	—
西京	8	5	1	1	—
伏見	11	7	2	2	—
合計	69	43	10	13	1

イ 年間報告数、定点当たり報告数の推移(表-4-1～5-2/p.34～37、図-1～2/p.63)

(ア) インフルエンザ定点

インフルエンザの年間定点当たり報告数は、101.01(6,970例)であった。インフルエンザについての詳細は、

「(2) イ 令和2年 インフルエンザのまとめ」(p.3)を参照。

(イ) 小児科定点

小児科定点からの10感染症の年間総報告数は8,001例、年間定点当たり報告数186.07で、平成22年以降の定点当たり報告数では、最も少なかった。上位5感染症は、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、突発性発しん、水痘、咽頭結膜熱の順となり、小児科定点全体の92.8%を占め、最も多い感染性胃腸炎は、51.4%を占めていた。

また、過去5年間(平成27年から令和元年まで)の平均値(過去5年平均値)より多い感染症はなかった

インフルエンザ定点及び小児科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数の過去5年平均値との比 ()内は前年比
インフルエンザ	6, 970	101.01	0.41 (0.34)
RSウイルス感染症	95	2.21	0.09 (0.08)
咽頭結膜熱	300	6.98	0.42 (0.37)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1, 987	46.21	0.74 (0.71)
感染性胃腸炎	4, 116	95.72	0.32 (0.38)
水痘	341	7.93	0.53 (0.46)
手足口病	145	3.37	0.04 (0.04)
伝染性紅斑	141	3.28	0.21 (0.08)
突発性発しん	682	15.86	0.87 (1.04)
ヘルパンギーナ	152	3.53	0.17 (0.19)
流行性耳下腺炎	42	0.98	0.07 (0.42)
合計	8, 001	186.07	—

(ウ) 眼科定点

眼科定点から急性出血性結膜炎の報告はなかった。流行性角結膜炎の年間総報告数は74例、年間定点当たり報告数7.40、定点当たり報告数の過去5年平均値との比0.37、前年比0.52であった。

眼科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と過去5年平均値との比 ()内は前年比
急性出血性結膜炎	0	0.00	—
流行性角結膜炎	74	7.40	0.37 (0.52)
合計	74	7.40	—

(エ) 性感染症定点

性感染症定点からの4感染症の年間総報告数は357例であり、その内訳は、性器クラミジア感染症196例、性器ヘルペスウイルス感染症92例、尖圭コンジローマ21例、淋菌感染症48例であった。前年比は、性器クラミジア感染症 0.98、性器ヘルペスウイルス感染症 0.95、尖圭コンジローマ 0.54、淋菌感染症 1.37であり、淋菌感染症で前年よりも増加した。

性感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と過去5年平均値との比 ()内は前年比
性器クラミジア感染症	196	15.08	0.83 (0.98)
性器ヘルペスウイルス感染症	92	7.08	0.97 (0.95)
尖圭コンジローマ	21	1.62	0.53 (0.54)
淋菌感染症	48	3.69	1.17 (1.37)
合計	357	27.46	—

(オ) 基幹定点

基幹定点対象感染症は8感染症あり、そのうち1感染症で報告があり、年間総報告数は2例であった。

ウ 月別の報告状況（表－6－1～表－10／p.38～46, 図－3／p.64～65）

感染症発生動向調査における令和2年の報告週対応表は、＜表－1／p.26＞に示すとおりである。また、週単位で報告される感染症の月別集計は、対応表に基づいて行っている。

インフルエンザ定点におけるインフルエンザの月別定点当たり報告数は、1月(61.71), 2月(29.65), 3月(9.33)の順となつた。

小児科定点における対象感染症の月別定点当たり報告数は、1月, 2月, 3月の順で多かった。感染症別報告数の月別1位は＜表－10／p.46＞に示すとおり、全ての月において感染性胃腸炎であった。

眼科定点及び性感染症定点における対象感染症の月別の報告数は、＜表－6－2／p.39＞に示すとおりである。

エ 年齢階級別の報告状況（表－11－1～14－2／p.47～54, 図－4／p.66～67）

インフルエンザ定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、0～9歳が3, 627例で全体の52.0%を占めた。

小児科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、1歳が最も多く18.2%を占め、以下、2歳 10.2%, 3歳 8.4%の順であり、4歳以下が総報告数の54.3%を占めた。

小児科定点における年齢階級別の感染症別報告数は、全ての年齢階級で感染性胃腸炎が1位であり、2位は、0～5箇月ではRSウイルス感染症、6箇月～11箇月及び1歳では突発性発しん、2歳以上ではA群溶血性レンサ球菌咽頭炎であった。

眼科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、30～39歳が23.0%と最も高く、次いで、40～49歳が24.3%, 20～29歳が17.6%の順であった。

性感染症定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、20～24歳が29.7%, 25～29歳が20.4%, 30～34歳が13.4%の順であった。

オ 行政区別の報告状況

行政区別の報告数、行政区別の定点当たり報告数、感染症別の行政区別割合及び行政区別の感染症別割合は、

＜表－15－1～18－2／p.55～62＞に示すとおりである。